

の町を領し、Tagazgaz を統御するトルコの王」云々とも記してある。この Kūsān といふ名は記事の上から考へると「高昌」に當ると思はれるにも係はらず、字音の上からはこれを否定しなければならぬことは既に<sup>29)</sup>ペリオ氏の論述したところである。余はこの Kūsān は高昌では無くして龜茲を指したもので、この摩尼教文書に見える Kūsān に應ずるものであらうと思ふ。Massudi の書にも Flügel<sup>30)</sup> の用ゐた寫本には Kūsān と書かれてあり、まさに Kūsān と讀むべきである。回鶻の領する町と記されてあることから直ちに高昌と考へるのは尤もの次第ではあるが、然も龜茲も勿論當時回鶻の領邑であり、領内の有名な町であつたことはいふまでもない。高昌は Qočo, Khočo 等の形で新疆出土のトルコ文書中に出て居るのであるから、回鶻の領邑といふだけで Kūsān, Kūsān を高昌に當てねばならぬ理由はない。余はこれを漢史にも龜茲回鶻と記して居る龜茲を指したか、或は Qočo の Tagazgaz といふべきを Kūsān の Tagazgaz と誤つたのであつて、その Kūsān は蒙古時代の曲先、苦先であり、そうしてそれは當時の土語漢語梵語等の形ではなく、トルコ人の間に行はれた形であつたであらうと思ふ。蒙古でこれを Kūsān と稱したのは、此のトルコ語の形を承けたものに外ならぬであらうと思ふ。

以上論述したやうに、此の摩尼教文書の中に現はれた地名は大に注意を要するもので、余の知る限り Qamil (Qamul) といふ地名はこゝに初めて文書の上に現はれたものであり、Solmi (Sulmi) の名を有する文書は既に發表されながら、不幸にして誤讀されて今日に至つたものであり、Kūsān も數種の文書に於て知られながら、遠く Gandhāra 地方を呼んだ名と解釋されて居つたものである。余の解釋の當否は固より嚴正なる學界の批判に待たなければならぬが、何れにしても此の斷簡の重要なる所以を傳ふるには充分であらう。